

〔論文〕

オーストラリア，シンガポールでの日本軍の 「痕跡」と「国際協調主義」

飯 島 滋 明

名古屋学院大学経済学部

要 旨

日本国憲法では、「国際協調主義」（憲法前文，98条）が基本原理とされている。「国際協調主義」からは、「かつての日本のような独善的な態度を改め，他国のことを尊重しながら国際社会で行動すること」が為政者に求められる。そして「国際協調主義」を実践するためには，アジア・太平洋戦争時の近隣諸国に対する日本軍の行為について正確な知識を持ち，近隣諸国や国際社会の歴史認識を視野に入れた上で国際社会で対応することが求められる。そうした政治をしなければ，「国際協調主義」を実践するどころか，外国との関係を悪化させる。「歴史認識」に関しては，オーストラリア国立戦争記念館では，アジア・太平洋戦争時の日本は「巨大な悪（immense evil）」とまで言われている。シンガポールのリー・クワンユー氏も日本の歴代政府の歴史認識に対して批判してきた。2007年に第1次安倍内閣の下では日本軍「慰安婦」について事実ではない旨の主張がなされたが，そうした安倍首相などに対し，アメリカ下院，オランダ，カナダ，EU，韓国，台湾の議会は「慰安婦」に関する事実を認めて謝罪することを求める決議を採択した。こうした事実が示すように，歴史に真摯に向き合わず，近隣諸国の歴史認識を軽視・無視した政治をおこなうことで，「国際協調主義」の理念とは相反する事態をもたらす危険性がある。

キーワード：国際協調主義，オーストラリア国立戦争記念館，シンガポール国立歴史博物館，歴史認識，侵略，日本軍「慰安婦」

Considering the principle of international cooperation in the
current constitutional law in the context of the trace of the
former Japanese army left in Australia and Singapore

Shigeaki IJIMA

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

発行日 2018年10月31日

1. はじめに

日本国憲法では「国際協調主義」が基本原理とされている（前文、98条）。「国際協調主義」について、かつて私は「世界平和の実現のために、日本が積極的な役割を果たすこと」とともに、「かつての日本のような独善的な態度を改め、他国のことを尊重しながら国際社会で行動すること」と紹介した¹⁾。後半の部分については、「いづれの国家も、自国のことのみ専念して他国を無視してはならない」という憲法前文の文言で示されている。

「他国を無視してはならない」という文言の内容として、各国の「歴史認識」への対応も含まれる。たとえ歴史的に近隣諸国との間に非人道的な出来事が存在したとしても、そうした悲惨な歴史に真摯に向き合った上で近隣諸国や国際社会に対応するのでなければ、「自国のことのみ専念して他国を無視」することになりかねない。そのことが他国との間の対立を生み出し、真の信頼関係を築くことの支障となる。憲法前文にある、「国際社会において名誉ある地位」を占めることもできなくなる。憲法の「国際協調主義」を実施するためには、まずは近隣諸国や国際社会が一般的にアジア・太平洋戦争時の日本軍の行為に対してどのような歴史認識を有しているかを正確に把握することが極めて重要である。こうした視点から、本稿ではオーストラリアとシンガポールでのアジア・太平洋戦争時の日本軍の行為の実態や評価などを紹介する。その上で、憲法の基本原理である「国際協調主義」の視点から、日本が国際社会でどのような対応をとるべきかを提起するのが本稿の目的である。

2. オーストラリアでの日本軍の「痕跡」

(1) 「巨大な悪 (immense evil)」とは

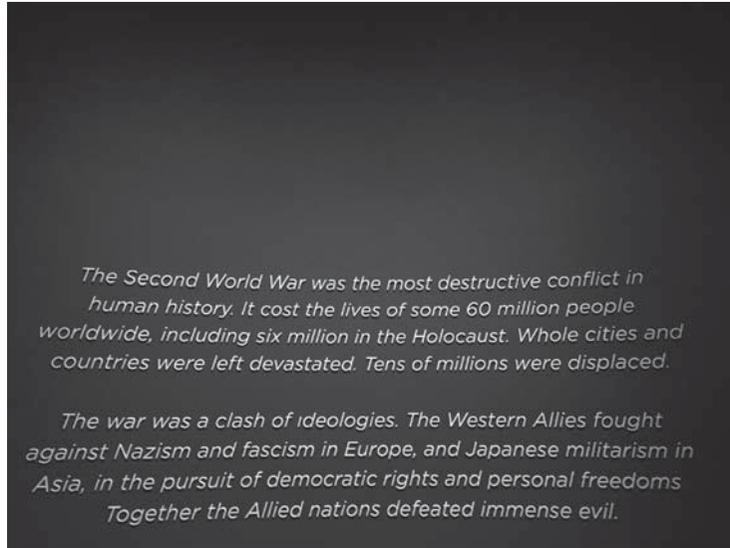
オーストラリアの首都、キャンベラ。バーリーグリフィン湖には黒鳥がいたり、バーリーグリフィン湖を横切る KINGS AVE の麓にはウサギがいるなど、豊かな自然と落ち着いた雰囲気キャンベラの特徴と言える。

そのキャンベラには、国立の戦争記念館がある。入場料は無料で、オーストラリアに関わるさまざまな戦争の展示がある。第2次世界大戦のコーナーの最後の部分の壁には、以下のように記されている。

「第2次世界大戦は人類の歴史の中で最も破壊的な紛争であった。世界中で約6000万人もの生命が犠牲となった。すべての都市と国は荒廃させられた。約1000万人が住むところを追われた。

その戦争はイデオロギーの衝突であった。西洋同盟国は民主的諸権利と個人の自由を求めて、

1) 榎澤幸広・奥田喜道・飯島滋明『これでいいのか！ 日本の民主主義 失言・名言から読み解く憲法』（現代人文社、2016年）79頁。



【写真1】オーストラリアの首都キャンベラにある「国立戦争記念館」での展示。2018年5月，飯島撮影。

ヨーロッパではナチズムとファシズムと，アジアでは日本の軍国主義と戦った。同盟国は一緒に巨大な悪を打ちのめした」。

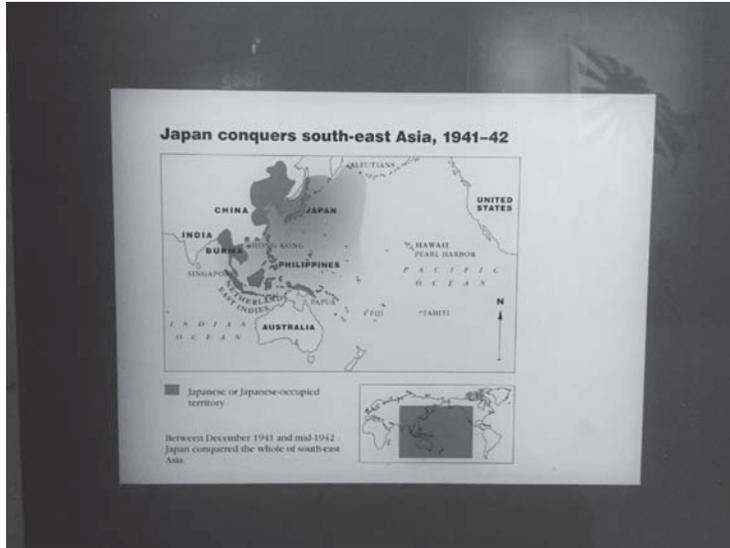
ここで言われる「巨大な悪 (immense evil)」とは誰のことか。ここでは田村恵子の以下の指摘を紹介する。

「太平洋戦争は，日本では対米戦争であったという認識が一般的には強いが，オーストラリアにとっては，まさしく対日戦争であった。それまで本土を直接攻撃された経験がなかったオーストラリアにとって，1942年2月から始まった日本軍によるダーウィンを中心とした豪北部地域の空爆は，衝撃的な出来事だった。それに追い討ちをかけるように，1942年5月末には日本軍特殊潜航艇によるシドニー湾攻撃他さらなる打撃を与えた。予想もしなかった奇襲攻撃だったうえに，シドニーの心臓部である湾内に3隻の小型潜航艇が侵入したことは，人々を恐怖におとしいれた」²⁾。

田村恵子が指摘するように，オーストラリアの歴史を通じてオーストラリア本国を攻撃した国は「日本」以外にはない。オーストラリアにとって「第2次世界大戦」とは，まさに日本との戦争である。そう考えると，「巨大な悪 (immense evil)」とは誰のことか，明確となろう。

戦争記念館のパネルには，「1931年，日本の軍国主義的政府は中国に征服戦争をはじめた (in

2) 田村恵子「日本軍特殊潜航艇の展示とその変遷」鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』（御茶の水書房，2012年）45頁。



【写真2】 オーストラリア国立戦争記念館での展示。
2018年5月，飯島撮影。

1931, a militarist government in Japan began a war of conquer against China)」と記されたものもある。【写真2】にもあるように、「1941年から1942の中頃まで，日本は全東南アジアを征服した」と紹介されている。

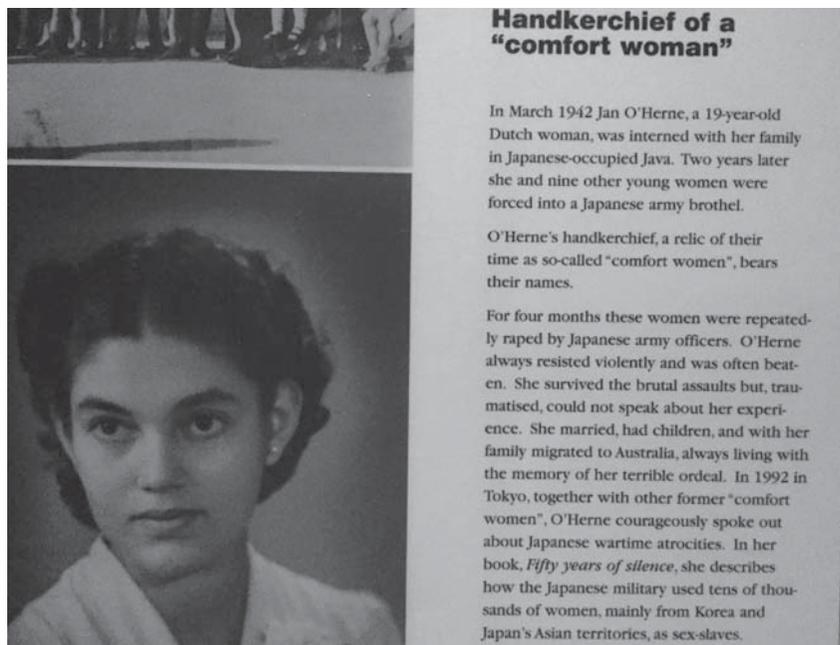
なお，ここで留意すべきは，オーストラリアの国立戦争記念館では日本のことを抽象的に「巨大な悪 (immense evil)」と言っているのではない。具体的な行為を紹介している。

以下，オーストラリア国立戦争記念館で紹介されている，かつての日本軍の「巨大な悪 (immense evil)」の具体的内容について紹介する。

(2) 日本軍「慰安婦」

オーストラリア国立戦争記念館には、「『慰安婦』のハンカチ」と題されたパネルが掲載されている(【写真3】)。この内容の概要を紹介すると、「1942年3月，19歳のオランダ人女性であったジャン＝ラフ＝オハーンさんは，日本が占領するジャバに家族とともに拘束された。2年後，彼女と9人の若い女性は日本軍の売春宿に強制的に連行された」。そしてその後のようすについては、「4か月間，彼女たちは繰り返し日本軍官吏により強姦された。彼女はいつも激しく抵抗したが，時に殴られた」と紹介されている。そして最後の箇所では，「『50年の沈黙』という本で，どのように日本軍が数万人の女性，主に朝鮮半島と日本のアジア領出身の女性を性奴隷 (sex-slaves) として利用したかをジャン＝ラフ＝オハーンさんは記している」と紹介されている。

なお，オーストラリア国立戦争記念館には，「戦争における女性」というコーナーが設けられており，ジャン＝ラフ＝オハーンさんの本も販売されている。



【写真3】オーストラリア国立戦争記念館での日本軍「慰安婦」の展示。
2018年5月，飯島撮影。右下では「性奴隷(sex-slaves)」と紹介されている。

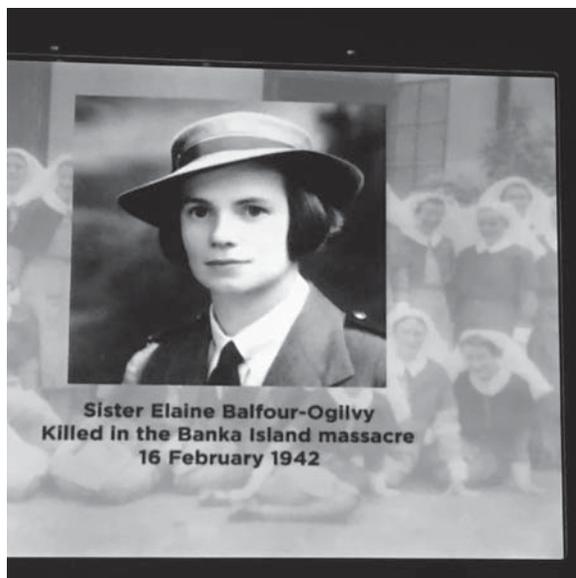
(3) 虐殺 (Massacre)

オーストラリアの国立戦争記念館には，日本軍による「虐殺」を紹介するコーナーも存在する。

【写真4】【写真5】にあるように，「バンカ (Banka) 島の虐殺」では若い女性が虐殺された事実が紹介されている。



【写真4】オーストラリア国立戦争記念館での展示。
2018年5月，飯島撮影。



【写真5】 オーストラリア国立戦争記念館での展示。
2018年5月，飯島撮影。



【写真6】 オーストラリア国立戦争記念館での展示。
2018年5月，飯島撮影。

アンボンのラハ飛行場での虐殺に関しては、「約300人のオーストラリア人が虐殺された。銃剣で刺殺されたり、打ち首にされたり、棒で殴り殺された」と紹介されている。

(4) 戦争捕虜

【写真6】にあるように、「3人に1人が死んだ戦争捕虜」とのパネルが掲示されている。より詳細に紹介すると、「1942年に日本が東南アジアを征服したとき、22000人以上のオーストラリア人が捕虜にされた。約8000人——3人に1人——が病気、飢餓、過重労働、残虐行為で命を落とした」と紹介されている。あばら骨が浮き出た【写真6】の写真は、日本軍が捕虜をどのように扱ったのかを示す展示となっている。

また、【写真7】のように、日本兵がオーストラリア人捕虜を「打ち首」にする写真も紹介されている。



【写真7】 オーストラリア国立戦争記念館での展示。
2018年5月，飯島撮影。

(5) 原爆投下について

オーストラリア国立戦争記念館には、原爆投下に関する展示もある。広島や長崎の原爆資料館の展示も、正直、目を覆いたくなるほど悲惨な写真などもある。しかし、オーストラリア国立戦争記念館には、ヒバクして全身やけどしている人の動画が流れているなど、よりなまなましい原爆の被害のようすが紹介されている。そして原爆投下は「議論的であり続ける」と紹介されている。原爆投下は「日本本土への侵攻や連合国軍の捕虜や人々の生命を救うために必要だった」という立場だけではなく、「多くの人びとを殺し、人類に対する核の脅威のはじまりとなった」という、原爆投下への批判的立場の両論が併記されている。

3. シンガポールでの日本軍の「痕跡」

いままではオーストラリアの首都キャンベラにある「国立戦争記念館」での展示を紹介した。次はシンガポール各地にある、アジア・太平洋戦争時の日本軍の行為に関する展示を中心に紹介する。

(1) 「血債の塔」

シンガポールといえば「マリナーズベイ・サンズホテル」をが思い浮かべる人が多いだろう。高さ200メートルにあるプール、屋上のバーなどはシンガポール観光のあこがれの一つであろう。ただ、「マリナーズベイ・サンズ」のちかくには、写真のように高い塔がある【写真8】。この塔は「戦争記念公園（WAR MEMORIAL PARK）」の中にあり、「血債の塔」と呼ばれる。

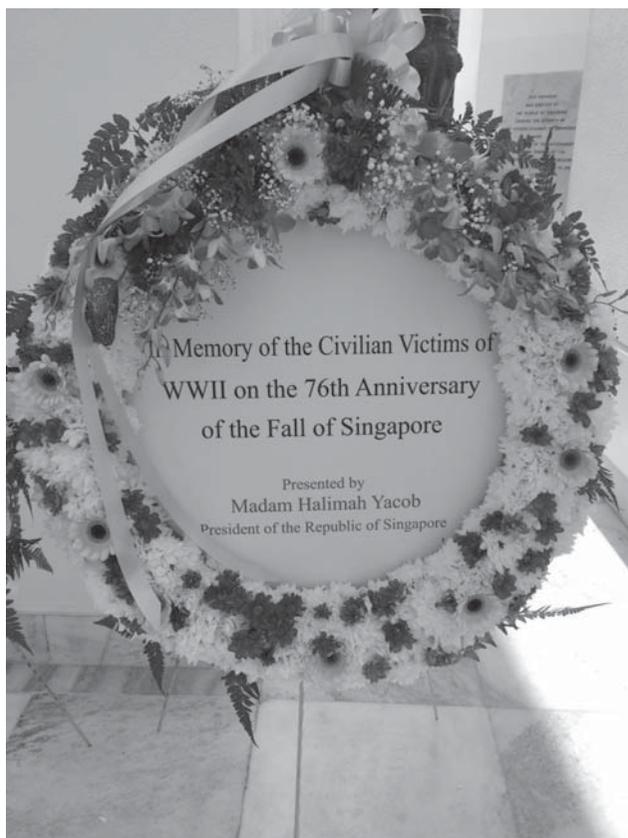


【写真8】「マリナーズベイ・サンズホテル」の近くにそびえ立つ「血債の塔」。2018年2月、飯島撮影。

「血債の塔」、正式には「日本占領時期死難人民記念碑」についてはいろいろな紹介がされているので、ここで詳しくは紹介しないが、日本占領期に日本軍により殺された犠牲者の追悼の塔である。この塔の下には台座があり、そこにも「深い永遠の悲しみをもって、日本軍がシンガポールを占領していた1942年2月15日から1945年8月18日までの間に殺された市民を追悼し、この記念碑は捧げられる」と記されている。

そして日本がシンガポールを占領した1942年2月15日にちなんで、毎年2月15日には「戦争記念公園（WAR MEMORIAL PARK）」で追悼式典が行われる。2018年2月15日にも9時から式典がはじまった。私も式典に参加しようとしたが、公園の入口にいた関係者から「Invitationは持っているか」と聞かれた。「持っていない」と答えると、入場は拒否された。ただ、遠くからではあるが、ところどころ、マイクの話が聞こえる。この式典は英語と他の言語で演説が行われていた。私が聞く限り、「Holocaust」という言葉が1回、「Japanese Occupation」という単語は3回聞こえた。

入口の式典関係者に「何時くらいに終わるのか」と聞いたところ、「おそらく11時頃」との返事がもどってきた。「関係者なのにそんなことにも答えられないのか」と思ったが、その理由が



【写真9】2018年2月15日の式典の際に献花された花輪。
2018年2月15日、飯島撮影。



【写真10】中央の女性がハリマ・ヤコブ大統領。
2018年2月15日、シンガポールのホテルにてTVの画面を飯島が撮影。

のちほどわかった。この式典に参加した人たちは10時くらいから次々と退出しだした。別々に入場し、別々に退場し出すので正確な時間をいえないのだろうと思った。制服を着ている、小学生くらいの子ども達が退出しはじめ、終わりのほうではシンガポール軍人が参加していた。「軍人」に関して驚いたのは、正直、日本では高校生くらいにしか見えない若者の男女が軍服を着ていることであった。

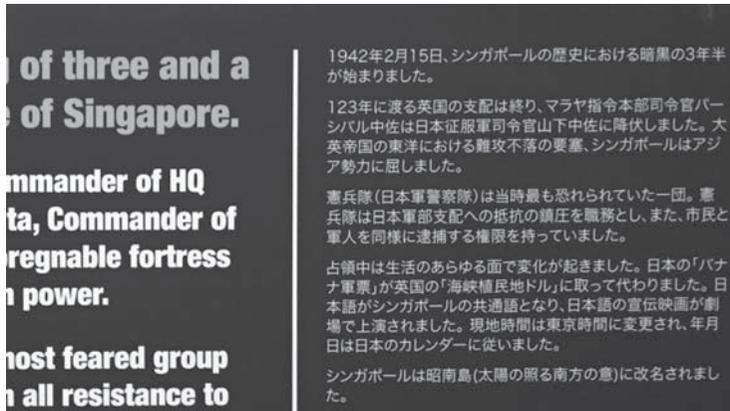
軍人が退出したのちには塔に近づくことができた。【写真9】で紹介しているように、この式典はハリマ・ヤコブ大統領「主賓 (Gest-Of-Honour)」となっている。そしてこの式典の様子は当日夜のテレビなどで紹介された (【写真10】)。

(2) シロソ砦

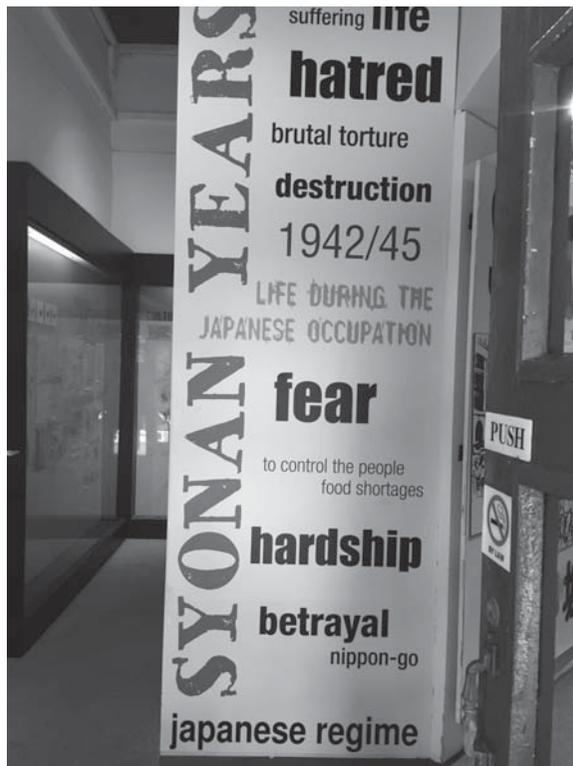
シンガポールでの「観光名所」といえば「セントーサ島」も挙げられる。「ユニバーサルスタジオ」があったり、海水浴のできる砂浜や「バンジージャンプ」もできる場所があるなど、シンガポールの一大観光地となっている。2018年6月にはトランプ大統領と金正恩総書記が歴史的会談を行ったことでも有名になった。熊本の「味仙拉麺」などもセントーサ島の入り口付近にある。その「セントーサ島」には「シロソ砦」がある。このシロソ砦も博物館となっている。ここでの提示のようすも紹介する。

まずは【写真11】をご覧ください。日本語でも日本のシンガポール統治のようすが紹介されている。

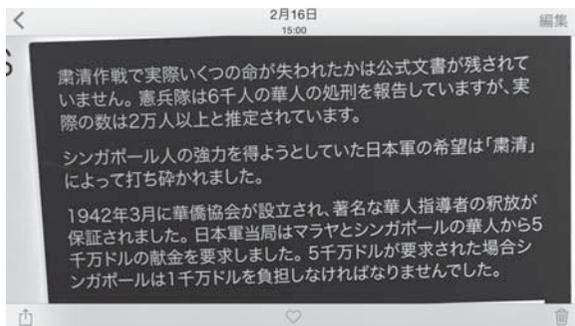
そして【写真12】のような展示もされている。私の写真撮影の技術が悪く、展示全体を写すことはできなかったが、「SYONAN YEARS」「日本統治」を示す語として、「Hatred」(憎悪)、「brutal



【写真11】 シンガポールのシロソ砦にある戦争記念館での展示。
2018年2月16日，飯島撮影。



【写真12】 シロソ砦にある博物館での展示。
2018年2月16日，飯島撮影。



【写真13】 シロソ砦にある博物館での展示。
2018年2月16日，飯島撮影。

Torture」(非人道的な拷問)、「fear」(恐怖)、「hardship」(困難)、「betray」(裏切)などの言葉が並んでいる。

このfearやhardshipを紹介する出来事として、ここでも「大検証」(中国人に対する大虐殺)と「強制献金」の事実が紹介されている(【写真13】)。大検証に関しては、「孫文記念館」の展示では、ゲリラや武装した中国人、義勇兵や反日本の活動を支援する中国人だけではなく、「多くの教師、法律家、学生や市民もまた無差別に虐殺された」と指摘されている。「マレーシアの父」と言われたラーマン首相も「日本軍の有名な「水攻め」という表現をしているが³⁾、この博物館でも「水攻め(Water Terture)」を紹介するパネルもある。

このように、シンガポールの一大観光地であるセントーサ島にもかつての日本軍の非人道的行為を示す博物館や展示が存在する。「セントーサ島」とは「平和の島」との意味だが、もともとは「ブラカンマティ島」=「死の島」と呼ばれていたものであり⁴⁾、やはり市民虐殺の地の一つであった。

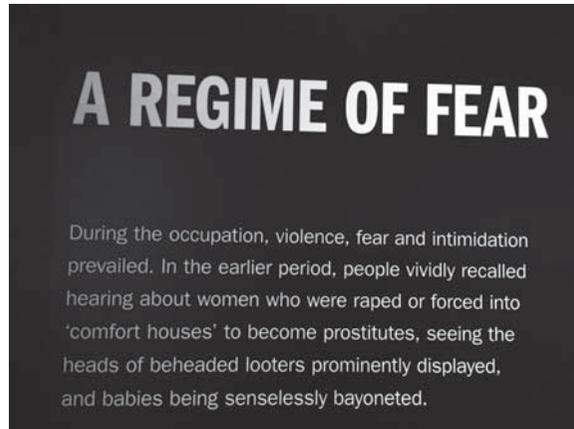
(3) 旧フォード工場跡

Downtown線のHillview駅で下車し、そこから約1.6キロの場所に「旧フォード工場跡」がある。1942年2月15日、山下奉文司令官がパーシバル司令官に「イエスカノーか」と迫った場所である「旧フォード工場跡」は現在、博物館になっている。この博物館の入場料はシンガポールドル3ドルで、「クレジットカード」での支払いとなる。この博物館では、フラッシュをたかない限り写真撮影が許可されている。そこでこの博物館の展示を紹介する。

繰り返しになるが、ここは山下奉文司令官がパーシバル司令官に「イエスカノーか」と迫った場所であり、その時の写真が提示されている。またこの博物館では、1941年12月8日に日本が真珠湾だけではなく、シンガポールや香港、フィリピンを空襲した事実や日本軍がマレー半島北

3) トゥック・アブドゥル・ラーマン・ブトラ／鍋島公子、小野沢純訳『ラーマン回想録』(勁草書房、1987年) 338頁。

4) 宮崎郁夫『物語 シンガポールの歴史』(中公新書、2013年) 46頁。



【写真14】旧フォード工場跡地の博物館での、「恐怖の体制」との題名の展示。2018年6月，飯島撮影。

東部に上陸した事実などが紹介されている。「恐怖の体制」との表題がつけられた【写真14】のパネルでは、「占領期，暴力，恐怖，が蔓延した」との文章で始まり，「強姦」や「慰安所」，「さらし首」，「赤ん坊を銃剣で突き刺す（bayonet）」という日本軍の行為が紹介されている。そして原爆投下に関しては，ソ連軍の満洲侵攻と2発の原子爆弾投下が日本を降伏に至らしめた旨の記述がなされている。

なお，この博物館の最後のコーナーでは，何人かの証言が紹介されている。日本がシンガポールを占領したときに14歳であったHedwig Anuer（女性）さんの証言を紹介する。

「長い間，私は日本に行こうとは全く思わなかった。そして1966年までは実際に日本に行かなかった。私が1週間日本に滞在したとき，多くの日本人に会った。そして彼らは私に戦争時の体験，食糧不足や爆撃を語った。そしてもちろん，原爆投下については私たちも知っていた。そして私たちは生存者の写真などを見た。そして私が認識したのは，日本人も私たち以上に被害を受けていたことだ。市民に対して権力を行使していたのは戦争遂行集団や軍事集団（the war group, the Military group）であった」。

（4）チャンギ博物館

チャンギ空港からタクシーで平均してシンガポールドル10ドル程度の場所に「チャンギ博物館」がある。入場料は無料である。ここでも日本軍による虐殺や日本軍性奴隷の事例が紹介されている。2018年6月にもチャンギ博物館に行ったが，改装中とのことであった。リニューアルされた際にはようすが違っているかもしれないが，2018年2月段階での展示の内容を紹介する。なお，チャンギ博物館では写真撮影が禁止されていたので，私のメモに基づく記述になることをご了承ください。「最悪の日々（DARKEST DAYS）」と記されたコーナーにはいろいろな写真が掲載されていた。そこには，多くの人々が目隠しをして座らされている写真があり，「日本

人への協力を拒否したインド兵士の虐殺 (Massacre of Indian soldiers who refuse to cooperate with the Japanese)」との説明がなされている。また、正座させられて目隠しをされている人の首を刀で切り落とそうとしている写真には、「オーストラリア人の戦争捕虜の死刑執行 (The execution of an Australian POW)」との説明が付されている。台に乗せられた2つの首の写真には、「略奪者たちの首が公の場所で晒されている (The Heads of looters are displayed in Public Places)」との説明文がある。

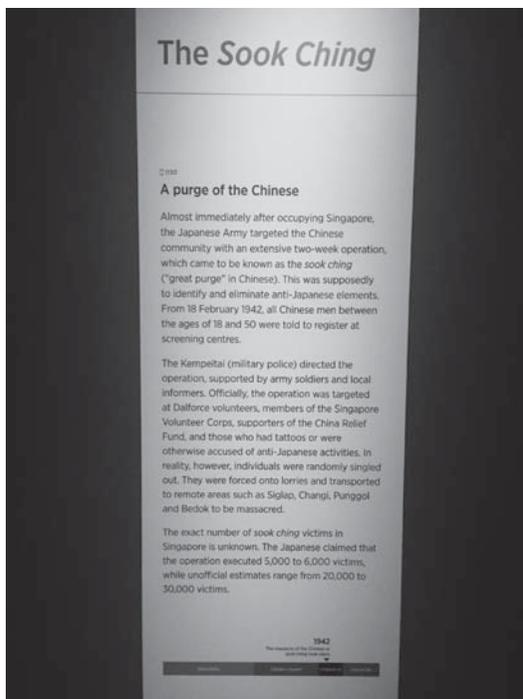
WOMEN & CHILDREN OF WORLD WAR II のコーナーには、ジャン＝ラフ＝オハーン氏の事件が紹介されている。「1944年2月、ジャン＝ラフ＝オハーン氏が21歳のとき、彼女の人生はかき乱された。ジャン＝ラフ＝オハーン氏は9人の若い女性たち——彼女らは全員処女であった——とともに、日本帝国軍によって強制的に性の相手をさせられた」と紹介されている。

(5) シンガポール国立博物館

最後にシンガポール国立博物館での日本軍の占領時代の展示の内容を紹介する。ただ、2017年9月と2018年2月、そして2018年6月と私はシンガポールに行き、調査をしたが、3回とも国立博物館の展示の内容が変わっている。私は本稿では2017年9月段階での記述について紹介する。「日の丸の下での生活」と記されたパネルでは、「昭南島」と名前が変更されたこと、「日の丸」「君が代」がイギリスの国歌・国旗の代わりとされたことなどが記されている (【写真15】)。さらに



【写真15】シンガポール国立博物館での展示。
2017年9月、飯島撮影。



【写真16】シンガポール国立博物館の入口。
2017年9月，飯島撮影。

【写真16】にあるように，中国人大虐殺である「大検証」や「捕虜」の扱いなどについても紹介されている。展示パネルでは「invade」「conquer」といった用語が並んでいる。「戦争捕虜」に関するパネルでは、「我々は永遠に空腹だ」といった発言も紹介されている。

4. なにが問題か

(1) 日本政府の対応

以上，本稿ではアジア・太平洋戦争などの際の日本軍の行為がオーストラリアやシンガポールの博物館などでどのように説明されているのかを紹介した。オーストラリア国立戦争記念館やシンガポール各地にある博物館などでも，日本軍は中国や東南アジア各国に「侵略戦争」をおこない，「市民の虐殺」「戦争捕虜の虐殺」「打ち首」「さらし首」「強姦」「日本軍「慰安婦」などの非人道的行為をおこなってきたことが紹介されている。オーストラリア国立戦争記念館では，旧日本軍の行為は「巨大な悪 (immense evil)」とまで言われている。

一方，日本の有力政治家や一部のメディアなどは，「日本は侵略戦争をした」という事実を認めず，あるいはその意義を軽減させる発言をしたり，そもそも侵略や非人道的行為事実自体がないといった主張をしてきた。ここで日本政府の対応を紹介するものとして，たとえば安倍首相の発言や政策を紹介する。

2013年4月23日、参議院予算委員会で安倍首相は「侵略という定義については、これは学界的にも国際的にも定まっていないと言ってもいいんだろうと思うわけでございますし、それは国と国との関係において、どちら側から見るとということにおいて違うわけでございます」と答弁している。

日本軍「慰安婦」については2007年3月16日、第1次安倍内閣は「狭義の強制はなかった」旨の閣議決定をした。2014年10月6日の衆議院予算委員会で安倍首相は「朝日新聞の慰安婦問題に関する誤報により、多くの人が苦しみ、そして悲しみ、そしてまた怒りを覚えたわけであります。そして、日韓関係に大きな影響、そして打撃を与えたとも言える、このように思います。そして、国際社会における日本の、日本人の名誉を著しく傷つけたことは事実であります」と発言している。

安倍首相は「侵略」の定義が国際的あるいは学界的にも定まっていないと発言することで、過去の日本軍の行為の性質を曖昧にしようとしている。また、日本軍「慰安婦」について誤った理解が世界に広まったのは朝日新聞の誤報が原因だとしている。

安倍首相だけではなく、日本は侵略戦争をしていない、「従軍慰安婦」はでっちあげ、日本軍には関係なく、民間業者の行為に過ぎない、日本軍「慰安婦」は日本の軍人よりも高い給料をもらっていた、あるいは朝日新聞が原因で誤った理解が広がったと主張されることが多い。このように、アジア・太平洋戦争時の日本軍の行為を日本の首相や有力な政治家たち、一部のメディアなどが声高に主張することは、憲法の基本原理である「国際協調主義」の実践にどのように影響するのであろうか。

(2) 歴史認識・国際社会認識の重要性

まず、「国際協調主義」の実践のための前提として、「歴史認識」「国際社会認識」の重要性について、具体的事例を挙げて紹介する。

【写真17】の新聞は、『ノーザンテリトリー』2016年2月19日付である。真ん中にある小見出しには、「日本にいる多くの人々は第2次世界大戦についてあまり知らない」と記されている。この記事の内容を紹介すると、岸田外務大臣と中谷元防衛大臣などは日豪両国の戦略的利益のために日本から潜水艦を輸入すべきことを積極的にオーストラリア政府に働きかけているが、彼らがオーストラリアに輸出しようとしている潜水艦の名前が、ダーウィン空襲に参加した空母と同じ名前の「Soryu」という名前であることが記載されている。そして「日本人たちは、潜水艦の名称にどれほど鈍感か、日本人はほとんどわかっていなかった」との、歴史家レバイス博士の発言が掲載されている。この新聞では、かつてアジア太平洋戦争の際にオーストラリアを攻撃した空母が「蒼龍」であるにもかかわらず、日本がオーストラリアに対して「Soryu」という潜水艦を輸出しようとした「無知」あるいは「無神経さ」が批判されている。「国益」という言葉、私はあまり好きではないが、「国益」という視点からしても、歴史的事実に関して正確な認識がない政治家たちの行動こそ、日本の国益を害することになるという「教訓」をこの記事からも得ることができる。



【写真17】『ノーザンテリトリー』2016年2月19日付。

(3) リー・クワンユー氏の発言から

歴史認識と「国際協調主義」の問題を考えるに際して、初代シンガポール首相で「シンガポール建国の父」と称されるリー・クワンユー氏の発言を紹介する。

まず、彼は「日本軍占領の悪夢」と日本占領時代を評価する⁵⁾。さらに日本軍の占領については「日本人は我々に対しても征服者として君臨し、英国よりも残忍で常軌を逸し、悪意に満ちていることを示した。日本占領の3年半、私は日本兵が人々を苦しめたり殴ったりするたびに、シンガポールが英国の保護下であれば良かったと思ったものである」とも発言している⁶⁾。「残忍で常軌を逸し」という部分については、具体的に回想録に記されている。たとえば「強姦」に関しては「中国での37年の残虐行為のあと、レイプと略奪は日本軍があおった恐怖の中で最も恐れられていたことである」とリー・クワンユーは指摘する⁷⁾。そして日本軍「慰安婦」に関しては以下のように発言している⁸⁾。

- 5) 『リー・クワンユー／小牧利寿訳『リー・クワンユー回顧録〔上〕』(日本経済新聞社、2001年) 61頁。
以下、本稿では同書を『リー・クワンユー回顧録〔上〕』と略記する。
- 6) 『リー・クワンユー回顧録〔上〕』35頁。
- 7) 『リー・クワンユー回顧録〔上〕』31頁。
- 8) 『リー・クワンユー回顧録〔上〕』40頁。

「降伏から2週間後、私は日本軍がケアンズ・ロードにあるタウン・ハウスの周辺に木の塀を立てたと聞いた。西ヨーロッパ人がシンガポールを離れたあと空き家となっていたもので、中流階級より上のクラスが保有していた邸宅街であった。私が自転車で通り過ぎると、塀の外側には蛇がくねるように並んだ日本兵の列が見えた。近所の人から、中には戦闘の前後に兵士にサービスするため従軍してきた日本と韓国の女性たちがいると聞いた。百人から二百人の男たちが自分の番を待つため並んでいる光景は壮観だった。私はその日女性を見かけなかったが、近所の人によると告知板には中国語で「慰安所」と書いてあった。このような慰安所は中国ではすでに設けられていた。ついにシンガポールまで来たわけである。慰安所は少なくともその他に4ヶ所あった。私は自転車で乗って回り、タンジョン・カントン・ロードには最大の施設があったことを覚えている。20軒から30軒の邸宅が木の塀で取り囲まれていた」。

「水攻め」などに関しては、彼がリム・キムサンから聞いた話として、以下の話を紹介している⁹⁾。

「一人の男の口からホースで水が注ぎこまれた。彼の胃の中が水でいっぱいになると、拷問者はその上で飛んだり跳ねたりした。彼は吐いて気を失った。毎朝、我々は重い靴音が独房に向かってくるのが聞こえると震えあがったものだ。それは尋問と拷問が始まる予兆であり、戻ってこない人もあった。我々は台湾人の職員が間をとりなしてくれることで救われた。私は刑務所内外で、日本人の真の姿を見た。親切さとお辞儀はうわべだけでその下には獣が潜んでいると思った。連合軍の勝利でアジアは救われたのだ」。

以上のような事実を紹介したうえで、リー・クワンユー氏は日本政府の対応について以下のように批判する。

「戦争が終わって50年もたつのに、歴代の自民党政府は、そして主要政党の主だった者、学界、そして大半のメディアはこの悪魔の行いについては語ろうとしない。ドイツと違い、彼らは世代が過ぎていくことでこのような行いが忘れられ、彼らの行為の記述が埃をかぶった記録の中に埋もれ去られてしまうことを願っている。もし、これらの過去を隣人に対して認めないならば、人々はこうした恐怖が繰り返されることもありえると恐れるしかない」¹⁰⁾。

(4) おわりに

歴史認識や国際社会認識については、安倍首相は「満州は攻め入って作ったわけではない」とか「満州の権益は、第1次世界大戦で日本がドイツの権益を譲り受けた」などと発言している(『赤

9) 『リー・クワンユー回顧録〔上〕』59頁。

10) 『リー・クワンユー回顧録〔上〕』60頁。

旗』2005年8月1日付)。また、ポツダム宣言と原爆については『VOICE』2005年7月号58頁で、「ポツダム宣言というものは、米国が原子爆弾を2発も落として日本に大変な惨状を与えた後、『どうだ』とばかりたたきつけたものだ」などと発言している。こうした発言に驚かれた人も少なくないかもしれない。残念なことに、安倍首相は中学校の教科書に載っている歴史的事実、あるいは日本の政治家であれば当然に知るべき、原爆投下をめぐる歴史的な流れすら正確な知識を持っていない。

また、「侵略」の定義は国際的あるいは学界的にも定まっていないなどとも安倍首相は発言するが、1974年12月14日には「侵略の定義に関する決議」が国連総会で採択された（国連総会決議29/3314）。「侵略の定義に関する決議」1条では、「侵略とは、1国による他国の主権、領土保全若しくは政治的独立に対する、又は国際連合憲章と両立しないその他の方法による武力の行使であって、この定義に定めるもの」とされている。そして3条では「侵略の具体的行為」が列挙されている。この侵略の定義に関する決議は『条約集』などにも掲載されており、それこそ政治家であれば当然知識を持っているべきである。

このように、中学校の教科書にすら載っている事実や、政治家であれば当然知識を持つべき事実を知らない政治家が国際社会で発言すれば、「国際社会において名誉ある地位」を占めるどころか、「日本の恥」を世界に晒すことになる。

そして安倍首相のように、正確な歴史認識を持たない政治家やいい加減なジャーナリストなどが「日本軍は侵略戦争をしていない」「日本軍慰安婦はでっちあげ」「朝日新聞が誤った情報を広げた」などとの発言を繰り返せばどうなるか。

本稿で紹介したように、オーストラリアやシンガポールの国立の博物館で「日本軍」の行為は「侵略」だと評価されている。オーストラリアの国立戦争記念館やシンガポールでの博物館などでも日本軍「慰安婦」の事例が紹介されているが、朝日新聞の情報に依拠したなどとはどこにも書かれていない。むしろ当時はオランダ人であり、いまはオーストラリア人であるジャン＝ラフ＝オハーン氏は自らの悲惨な体験をもとに、日本政府の対応を批判している。そして安倍首相などに謝罪を求める放送がオーストラリアでなされている（【写真18】【写真19】）。

にもかかわらず、「朝日新聞の虚報のために国際社会に悪影響を及ぼした」などと発言する安倍首相などの発言は、国際社会からはどう思われるか。中国や韓国とは歴史認識めぐり、日本との関係が悪化することも少なくないが、日本政府の対応や一部のメディアの主張がオーストラリアやシンガポール市民に知れわたった時、これらの国々の市民は日本を信頼するだろうか。「信頼」どころか、近隣諸国や国際社会が日本に対する不信感を募らせることはないのか。本稿はオーストラリアやシンガポールでの歴史認識を紹介することを主眼にしているが、シンガポールでの日本軍の行為とも関連するマレーシアでの日本軍の行為に関して、「マラヤの父」「マレーシアの父」と称賛されてきたラーマン元首相も回想録で「日本軍の横暴」と占領時代を称し、虐殺や略奪、拷問や「水攻め」の事実を紹介している¹¹⁾。アジア・太平洋戦争時に日本軍から非人道的行

11) 前掲注3) 文献335-345頁。



【写真18】2016年2月17日、THE WORLDという番組で証言する、元日本軍性奴隷の被害者ジャン・ラフ・オハーン氏。



【写真19】2016年2月17日、THE WORLDという番組で証言する、元日本軍性奴隷の被害者ジャン・ラフ・オハーン氏。彼ら〔安倍首相などの政治家〕が謝罪し、「申し訳なかった」と言うことを望むとジャン・ラフ・オハーン氏が述べている場面。

為を受けた近隣諸国の民衆は、「日本は侵略戦争をしていない」「日本軍慰安婦や南京大虐殺はでっちあげ」「大東亜戦争はアジア解放のための戦争であった」などと首相や大臣、一部のメディアが発言していることをどう受け止めるだろうか。

ここで日本軍「慰安婦」に関する安倍内閣と国際社会の対応を紹介するが、2007年3月1日、安倍首相が日本軍「慰安婦」に関して「官憲が家に押し入って人さらいのようにつれていく強制はなかった」と発言すると、この発言は国際社会で報じられた。3月16日には「狭義の強制はなかった」といった閣議決定がなされた。こうした安倍首相の対応に対し、ワシントンポストは2007年3月24日付で「安倍晋三の嘘つき」との題名の記事で安倍首相の発言を批判した。さらに6月14日、日本の右翼議員や桜井よし子氏などの右翼的人物が「ワシントンポスト」に日本軍「慰安婦」を否定する広告を出した。安倍首相や右翼の存在の国会議員やジャーナリストの対応に対し、ア

アメリカ下院では、事実を認めて謝罪することなどを安倍首相や日本政府に要求する決議が採択された。アメリカだけではなく、2007年から2008年にかけてオランダ、カナダ、EU、韓国、台湾の議会でも、日本政府に対して「慰安婦」に関する事実を認めて謝罪することを求める決議が採択された¹²⁾。

憲法の基本原理である「国際協調主義」を実践するためには、「満州はドイツの権益を譲り受けた」「原爆投下後にポツダム宣言が突き付けられた」などといった誤った歴史認識ではなく、アジア・太平洋戦争時の近隣諸国に対する日本軍の行為について正確な知識を持つ必要がある。オーストラリア国立戦争記念館では、日本は「巨大な悪 (immense evil)」とまで記述されている。そして近隣諸国や国際社会が日本軍の行為などについてどのような認識と評価をしているのかを正確に把握する必要がある。その上で近隣諸国や国際社会で対応することが「国際協調主義」を実践するためには必要である。そうした政治をしなければ、「国際協調主義」を実践するどころか、外国との関係を悪化させ、韓国や中国との関係のように、そしてシンガポールのリー・クワンユー氏も日本の歴代政府の歴史認識に対して批判してきたように、「国際協調主義」の理念とは相反する事態をもたらす危険性がある。

※本研究ノートは、2017年度平和学研究会の成果の一部である。

12) 渡辺美奈「世界は日本軍「慰安婦」をどう見てきたか」林博史／俵義文／渡辺美奈『「村山・河野談話」見直しの錯誤 歴史認識と「慰安婦」問題をめぐって』(かもがわ出版、2013年) 76-78頁。